



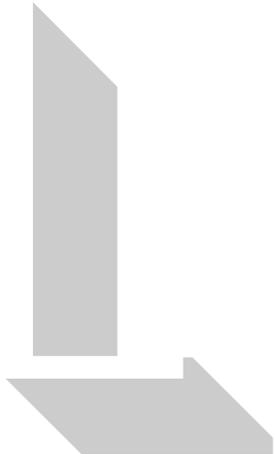
**脂質生化学研究
Circular**



2026



**日本脂質生化学会
(JCBL)**



日本脂質生化学研究 サークュラー 2026

目次

| | | |
|---|-------|----|
| 第 68 回日本脂質生化学会のお知らせ | | 1 |
| 第 68 回日本脂質生化学会 | | |
| 特別講演、シンポジウム、ランチョンセミナーのお知らせ | | 4 |
| 第 68 回 日本脂質生化学会 優秀発表者賞について | | 6 |
| 第 68 回 日本脂質生化学会 会場のご案内 | | 7 |
| 令和 8 年度日本脂質生化学会 総会・幹事会のお知らせ | | 8 |
| 第 68 回日本脂質生化学会 発表演題の募集 | | 9 |
| 第 68 回日本脂質生化学会 講演要旨作成要項 | | 10 |
| 第 68 回日本脂質生化学会を開催するにあたって | 森田 真也 | 11 |
| 第 67 回日本脂質生化学会を開催して | 横溝 岳彦 | 13 |
| 第 67 回日本脂質生化学会 優秀発表者 | | 15 |
| 第 67 回日本脂質生化学会に参加して | 佐藤 遥佳 | 18 |
| 第 65 回国際脂質生物学会議 (65 th ICBL) に参加して | 安藤 美沙 | 19 |
| 第 66 回国際脂質生物学会議 (66 th ICBL) のご案内 | 横溝 岳彦 | 21 |
| 第 18 回国際エイコサノイド会議のご案内 | 横溝 岳彦 | 22 |
| 膜機能解析を目指したリン脂質の化学合成 | 安部 真人 | 24 |
| 脂質生化学が繋ぐ未知とサイエンスの未来 | 岩部 美紀 | 26 |
| 脂質生化学と脂質異常症臨床との架け橋 | 小倉 正恒 | 28 |
| 脂質代謝を制御するメディエーターを | | |
| 適時・適所に配置するトランスポーター | 中西 猛夫 | 30 |
| 糖脂質研究の歩み—自然免疫と感染制御に関わる探求— | 中山 仁志 | 32 |
| 脂質研究から挑戦する脳血管の未解明問題 | 柳田 圭介 | 34 |
| ステロールの構造的・機能的多様性に魅せられて | 山内 祥生 | 36 |
| 会の活動状況 | | 38 |
| 賛助会員 | | 44 |

| | |
|-----------------|----|
| 日本脂質生化学会 会則 | 45 |
| 学会事務の取り扱い内容と連絡先 | 47 |

第 68 回 日本脂質生化学会のお知らせ

日程：2026 年（令和 8 年）6 月 4 日（木）、5 日（金）

会場：滋賀県立文化産業交流会館

〒521-0016 滋賀県米原市下多良 2 丁目 137

TEL：0749-52-5111、HP：<https://www.s-bunsan.jp/>

JR 新幹線 米原駅 徒歩数分

※会場へのアクセスについては、「会場のご案内」をご覧ください。

実行委員長：森田真也（滋賀医科大学 薬物治療学講座 教授）

〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町

TEL：077-548-2680

Email：jcbl2026@belle.shiga-med.ac.jp

大会ホームページ：<https://www.shiga-med.ac.jp/jcbl2026/>

発表形式：一般演題発表 A 発表 10 分＋討論 5 分＝15 分

一般演題発表 B 発表 7 分＋討論 3 分＝10 分（ショートトーク）

※一般発表演題 B（ショートトーク）は、プログラム編成の都合上、ご自身の演題とは異なる研究分野の演題と同じセッションになる可能性があります。

講演要旨：講演要旨集「脂質生化学研究」冊子体は国会図書館および 16 の大学図書館等に寄贈し、それぞれの図書館において閲覧可能となります。さらに、発刊から 5 年経過したものは国会図書館で電子化されて Web 公開されます。これらの点を予めご了解ください。

講演要旨の著作権は本学会に帰属することをご了解ください。講演要旨の作成にあたっては、著作権、知的財産権および二重投稿と解釈されることへの懸念等についてご留意ください。

演題登録期間：2026 年 1 月 26 日（月）～2 月 20 日（金）

演題要旨提出締切：2026 年 3 月 6 日（金）

事前参加登録期間：2026 年 1 月 26 日（月）～4 月 6 日（月）

（5 月下旬に参加証を送付予定）

名誉会員、賛助会員の皆様には別途ご案内申し上げます。

参加登録の方法

今回、事前ならびに当日の参加登録と懇親会参加申込は、JTB 社の Web 参加登録サイト AMARYS にて行っていただきますようお願いいたします。大会ホームページ (<https://www.shiga-med.ac.jp/jcbl2026/>) から参加登録サイト AMARYS に移動し、案内に従って入力して下さい。事前登録ではクレジットカード決済ならびにコンビニ支払が可能で、当日登録ではクレジットカード決済が可能です。当日に、Web 参加登録もしくはクレジットカード決済が困難な場合は、現金支払を受け付けます。

参加登録費、懇親会費はできるだけ事前にお支払いください。なお、お支払いいただいた参加登録費、懇親会費の払い戻しは致しかねますので、ご了承ください。

宿泊のご案内

交通、宿泊についての学会からの手配はございません。

第 68 回 日本脂質生化学会
特別講演、シンポジウム、ランチオンセミナーのお知らせ

特別講演

「生命機能を紡ぐアラキドン酸代謝」

講演者：杉本 幸彦（熊本大学大学院生命科学研究部 教授）

座長：森田 真也（滋賀医科大学）

シンポジウム 1（日本植物脂質科学研究会 協力）

「細胞内脂質輸送と代謝ダイナミクスが司る生理機能」

オーガナイザー：木村 泰久（京都大学大学院農学研究科）、中村 友輝（理化学研究所環境資源科学研究センター）

予定演者：阿部 一啓（北海道大学大学院理学研究院）、石川 寿樹（埼玉大学大学院理工学研究科）、木村 泰久（京都大学大学院農学研究科）、小林 康一（大阪公立大学国際基幹教育機構）、鈴木 淳（京都大学高等研究院物質-細胞統合システム拠点）、中村 友輝（理化学研究所環境資源科学研究センター）

シンポジウム 2

「Lipid nanoparticles：物理化学から疾患まで」

オーガナイザー：奥平 桂一郎（大阪医科薬科大学薬学部）、山内 祥生（東京大学大学院農学生命科学研究科）

予定演者：河野 健一（広島大学大学院医系科学研究科）、幸谷 愛（大阪大学微生物病研究所）、中野 実（富山大学学術研究部薬学・和漢系）、村上 達也（富山県立大学工学部医薬品工学科）、山内 祥生（東京大学大学院農学生命科学研究科）、横山 信治（中部大学応用生物学部）

日本脂質生化学会・日本膜学会共催シンポジウム

（大会前日 6 月 3 日（水）午後 開催）

「細胞膜構造」

オーガナイザー：森田 真也（滋賀医科大学）

予定演者：池ノ内 順一（九州大学大学院医学研究院）、植田 和光（京都大学 iCeMS）、川本 純（京都大学化学研究所）、末次 志郎（奈良先端科学技術大学院大学）、鈴木 健一（岐阜大学糖鎖生命コア研究所/国立がん研究センター研究所）、辻 琢磨（北海道大学遺伝子病制御研究所）、中瀬 生彦（大阪公立大学大学院理学研究科）、森田 真也（滋賀医科大学）

ランチョンセミナー（開催予定）

日程・演者等につきましては、今後変更の可能性があります。最新の情報は、大会のホームページに掲載いたします。

第 68 回 日本脂質生化学会 優秀発表者賞について

若手優秀発表者賞

対象：以下の全ての条件を満たす者。

- 令和 8(2026)年 4 月 1 日現在、日本脂質生化学会会員の者
- 令和 8(2026)年 4 月 1 日現在で博士の学位を取得後 8 年未満の者（博士の学位を取得後に取得した産前・産後の休暇、育児休業の期間を除くと博士の学位取得後 8 年未満となる者を含む。）
- 研究室を主宰する研究者（PI）から推薦を受けたもの（PI 1 名につき、候補者 1 名を推薦することができる。自分自身が PI の場合、自薦を可能とする。）

学生優秀発表者賞

対象：以下の全ての条件を満たす者。

- 令和 8(2026)年 4 月 1 日現在、日本脂質生化学会学生会員の者
- 発表当日に、大学学部もしくは大学院に学生として籍を置く者
- 研究室を主宰する研究者（PI）から推薦を受けたもの（PI 1 名につき、学生 1 名を推薦することができる。）

申込方法

- エントリー希望と、推薦した PI の所属・職位・氏名を、UMIN の ELBIS システムに登録する。

審査方法

- 一般演題 A（15 分）としてエントリーされた演題の中から選ぶ。
- 若手審査枠 5 名、学生審査枠 5 名とし、それぞれ 2 名の座長で 75 分ずつのセッションを 2 件設ける予定。
- エントリー数が多い場合は、プログラム編成委員会にて予備審査を行い、1 セッション 5 名に絞る予定。
- 候補者は、学会第 1 日目の午前中に一般演題として発表を行う。
- 幹事から構成される審査委員会が、審査を行う。
- 学会第 1 日目夕方の特別講演終了後に会場で審査結果を発表し、受付にて受賞者リストを掲示し、懇親会にて表彰式を行う。

表彰

- 大会長名で表彰する。
- 各賞の受賞者数はエントリー数に応じて数名程度とする。
- 受賞者には賞状ならびに副賞を授与する。

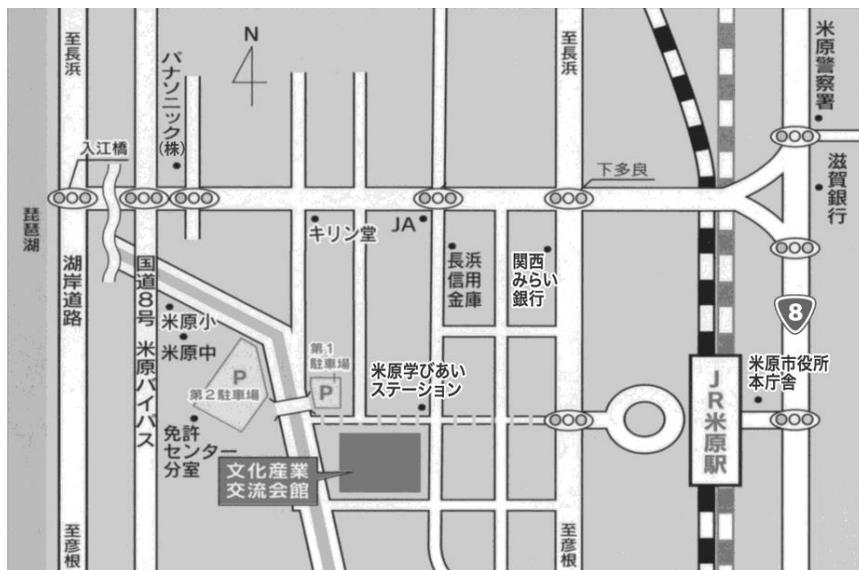
第 68 回 日本脂質生化学会 会場のご案内

大会会場：滋賀県立文化産業交流会館

〒521-0016 滋賀県米原市下多良 2 丁目 137

TEL：0749-52-5111

<https://www.s-bunsan.jp/access>



主なアクセス方法

- ・ JR 米原駅より徒歩数分
- ・ JR 京都駅から JR 米原駅まで東海道新幹線で 19 分
- ・ JR 東京駅から JR 米原駅まで東海道新幹線で 2 時間 6 分

令和 8 年度 日本脂質生化学会総会のお知らせ

上記の総会を令和 8 年 6 月 4 日（木）夕刻、特別講演終了後（開催時刻・会場は改めてご案内差し上げます）開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 花田 賢太郎

- 議題
1. 令和 7 年度事業報告
 2. 令和 7 年度決算報告ならびに監査報告
 3. 令和 8 年度事業計画ならびに予算案
 4. その他

令和 8 年度 日本脂質生化学会幹事会のお知らせ

上記の幹事会を令和 8 年 6 月 4 日（木）昼頃に開催いたします（開催時刻・会場は改めてご案内差し上げます）。幹事・名誉会員の皆様のご出席をお願いいたします。

会長 花田 賢太郎

- 議題
1. 令和 8 年度日本脂質生化学会総会への提案事項の検討
 2. その他

第 68 回日本脂質生化学会 発表演題の募集

○演題の申し込みについて

本年度も演題登録は「大学医療情報ネットワーク(UMIN)の ELBIS システム」を用いて、インターネット上から行います。連絡用に電子メールのアドレスが必要ですので、各自ご用意下さい。また印刷用の講演要旨は、電子メールの添付ファイルで下記事務局 (jcbl.org@gmail.com) までお送りください。PDF ファイルと Word ファイルの両方を送付して頂きます。

一般講演の筆頭演者は本学会の会員に限ります。未入会の方は必ず令和 8 年 3 月末までに入会手続きを完了してください。

演題登録の開始は 2026 年 1 月 26 日 (月)、締め切りは 2026 年 2 月 20 日 (金) です。講演要旨送付の締め切りは 2026 年 3 月 6 日 (金) です。

○ 演題登録の仕方

- 1) 次ページの作成要領に従って講演要旨を作成して下さい。「要旨 (600 字以内)」は演題登録の際に必要ですので、ワープロファイルまたはテキストファイルをご用意下さい。
- 2) 第 68 回日本脂質生化学会のホームページ (<https://www.shiga-med.ac.jp/jcbl2026/>) にアクセスし、「演題申込」を選択して下さい。
- 3) 与えられた指示に従って演題登録を行って下さい。必須項目を空欄のままにしておきますと、登録ができませんのでご注意下さい。登録内容は締め切りまで変更可能ですが、登録の際に入力したパスワードが必要になりますので、必ずメモを取って下さい。一般発表は 15 分発表 (討論含む) と、若手や新規分野の発表を促すために 10 分発表 (ショートトーク、討論含む) を設けます。
- 4) 登録終了後、抄録登録[受付番号]というタイトルの電子メールが発表代表者に届きますので必ず保存しておいて下さい。
- 5) インターネットでの問題により演題登録ができない方は、講演要旨をお送り頂く前に、以下の講演要旨送付先までご連絡下さい。

○ 講演要旨送付先 (PDF ファイルと Word ファイルの両方をお送り下さい)

E-mail アドレス : jcbl.org@gmail.com

〒162-8655 東京都新宿区戸山 1-21-1

国立健康危機管理研究機構 国立国際医療研究所 脂質生命科学研究部

日本脂質生化学会 講演要旨受付 (担当 : 橋立 智美) , Tel: 03-5273-5351

○ 学会についてのお問い合わせ

E-mail : jcbl2026@belle.shiga-med.ac.jp

〒520-2192 滋賀県大津市瀬田月輪町

滋賀医科大学

第68回日本脂質生化学会事務局 (森田)

Tel: 077-548-2680; Fax: 077-548-2680

第68回日本脂質生化学会 講演要旨作成要領

1. テンプレートを使用する場合、第 68 回日本脂質生化学会のホームページ (<https://www.shiga-med.ac.jp/jcbl2026/>) から「講演要旨作成テンプレート」をダウンロードし、マイクロソフト Word で作成して下さい。テンプレート上で入力すれば、字体や大きさが統一されます。
2. テンプレートを使用されない場合は以下の要領で作成して下さい。
 - * A4 サイズ、縦 260 mm×横 170 mm の大きさで作製して下さい。原則として字の大きさは 12 ポイント、フォントは「MS 明朝」、「Times New Roman」をご使用下さい。要旨集印刷の際、4/5 程度に縮小されて印刷されます。ページ番号は付けなくて下さい。
 - * 演題名：全角 8 文字目から書き始め、2 行以内に納めて下さい。
 - * 氏名・所属：演題名より 1 行空けて下さい。全角 8 文字目から氏名を書き、所属は適当な略記を用いて () 内に入れて下さい。発表者（または連絡著者）の電子メールアドレスを記載して下さい。
 - * 要旨：氏名・所属より 1 行空け、全角 1 文字空けて書き始めて下さい。全体を枠で囲んで下さい。
 - * 本文：要旨より 2 行空けて下さい。
3. 講演要旨の作成にあたって
 - * 1 ページから 6 ページの範囲で作成して下さい（要旨のみ（本文なし）も可）。
 - * 日本語か英語で作成して下さい。
 - * 講演要旨により、日本脂質生化学会会則第 2 条に定められた本会の目的に沿わないと判断される演題は、発表をお断りすることがあります。
 - * 講演要旨の著作権は本学会に帰属することをご了解ください。
 - * 講演要旨集は従来の紙媒体以外に、WEB に掲載することを検討しております。WEB 掲載について予めご了解ください。
 - * 講演要旨の作成にあたっては、著作権、知的財産権、及び二重投稿と解釈されることへの懸念等についてご留意下さい。
4. 講演要旨の送付にあたって
 - * 講演要旨の PDF ファイルおよび Word ファイルを、前ページの「講演要旨送付先」まで電子メールの添付書類としてお送り下さい。ファイル名は「登録番号 氏名」として下さい。
 - * 電子メールの「件名」の欄に、演題登録後に届いた「抄録登録[受付番号]」を明記して下さい。

講演要旨送付の締め切りは 2026 年 3 月 6 日(金)です。

なお、WEB からの演題登録（2 月 20 日（金）締め切り）を忘れずに行ってください。

第 68 回 日本脂質生化学会を開催するにあたって

実行委員長
滋賀医科大学
薬物治療学講座 教授
医学部附属病院薬剤部 部長
森田 真也

2026年6月4日(木)、5日(金)の両日に、第68回日本脂質生化学会を滋賀県米原市の滋賀県立文化産業交流会館で開催します。日本での脂質研究を牽引してきた歴史のある日本脂質生化学会の大会を実行委員長として開催するのは、大変光栄なことであり、重責を感じています。本会の目的である研究者相互の交流を重視した大会にしたいと考えています。

私が本会に初めて参加したのは、2002年に東京(早稲田大学)で開催された第44回日本脂質生化学研究会研究集会です。その当時は、物理化学系の半田哲郎先生の研究室で、大学院生として脂質研究に取り組んでいました。脂質生化学にも興味を持ち、実はその前年に脂質生化学研究会に参加して発表したいと半田先生に直訴しましたが、まだ研究が脂質生化学研究会で発表できるレベルに達していないという判断で発表に至りませんでした。そして遂に翌年に脂質生化学研究会で発表することができ、質疑応答や懇親会で多くの先生からサジェスションをいただけたことに感銘を受けたことを覚えています。それ以来、ほぼ毎年、所属研究室が変わっても自身の興味で脂質生化学会に参加し、多くの研究者の皆さんとネットワークを広げることができましたが、まさか自分が実行委員長として開催することになるとは想像しておらず、感慨深いものがあります。

過去の大会の記録を確認しましたところ、1965年の第7回に大津で開催されており、滋賀県での開催はそれ以来61年ぶり、滋賀県北部での開催は初めてとなります。所属している滋賀医大は大津にあります、JR新幹線の米原駅近くに立派な県立の会館があるため、交通の便を考えて米原での開催としました。「琵琶湖を制するのは天下を制す」という言葉もあるそうで、古くから近江(滋賀県)は京の都に近く、琵琶湖の水運と主要な街道が交差する交通の要衝として発展してきました。会場となる米原の近くにも、国宝彦根城をはじめとして、長浜城や安土城跡、八幡堀、竹生島など歴史的な名所が数多くありますので、時間がありましたらぜひお立ち寄り下さい。

第68回大会では、特別講演として杉本幸彦先生(熊本大学大学院生命科学研究部)に「生命機能を紡ぐアラキドン酸代謝」というタイトルで講演していただきます。細胞膜からアラキドン酸含有リン脂質を見つけ出してプロスタグランジンやカンナビノイドに変換して生命機能を完遂する様子が、まるで繭から生糸を作るみたいだというので「紡ぐ」という言葉をタイトルに使われたそうです。

シンポジウム 1 は、日本植物脂質科学研究会に協力していただき、「細胞内脂質輸送」をテーマに行います。細胞内脂質輸送は、動物細胞・植物細胞・真菌・細菌のいずれの活動においても重要であり、共通点も多いことが予想されますが、未知の部分が多く残されていることから、生物の種類を超えた視野で討論を行うことで新たな展開が生まれることを期待しています。シンポジウム 2 では、「脂質ナノ粒子」をテーマに、細胞外小胞ならびにリポタンパク質について、物理化学的性質から疾患との関連まで幅広い視点から講演を行っていただきます。

一般演題の口頭発表は、基本の 15 分枠に加えて、ショートトークの 10 分枠も設定しますので、立ち上げたばかりのチャレンジングな研究発表も大歓迎です。指導教員の先生は、まだ学会発表未経験の学生にもぜひ発表を勧めて下さい。今回で 3 回目となる若手研究者と学生を対象とする優秀発表者賞にも、奮ってご応募下さい。

さらに、大会前日の 6 月 3 日（水）に、日本脂質生化学会と日本膜学会の共催で「細胞膜構造」をテーマにしたシンポジウムを開催します。脂質生化学会もしくは膜学会に属している研究者から、様々な最新技術を駆使して取り組んでいる細胞膜構造研究の現状を報告していただきます。シンガーとニコルソンが細胞膜の流動モザイクモデルを 1972 年に発表してから 50 年余りが過ぎましたが、細胞膜構造研究はまだまだ発展途上であり、本シンポジウムで異なる分野の研究者が意見交換することで、細胞膜構造のさらなる解明のきっかけになればと考えています。

第 68 回日本脂質生化学会では、他学会とも協力することで、異分野クロスオーバーを導くことを主題と考えており、異なる技術の融合による新たな脂質生化学研究の進展へと繋がりましたら幸いです。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

第 67 回日本脂質生化学会を開催して

順天堂大学医学部 生化学第一講座
横溝 岳彦

2025年6月9日(月)、10日(火)の二日間にわたって、東京都江戸川区船堀駅に隣接する「船堀タワーホール」にて第67回日本脂質生化学会を開催いたしました。登録者数は230名で、賛助企業からの参加者を含めると約250名の参加を得て盛会となりました。特別講演とシンポジウムを含めて93演題の発表を頂きました。

特別講演では質量分析で著名な業績をあげておられる九州大学生体防御研究所の馬場健史教授に、脂質抽出から質量分析までを自動で行うロボットの開発に関するご講演を頂きました。後日、このロボットを実際に拝見する機会を得ましたが、自動化によって測定の際のばらつきがほとんど生じなくなる事に驚き、施設間での測定の標準化に大きく貢献することを実感しました。シンポジウムに関しては、私の専門である脂質メディエーターと、質量分析イメージングに関する二つのシンポジウムを企画しました。実際に手を動かして実験されている比較的若手の研究者にお話いただく事で、臨場感あふれる発表になったのではないかと考えています。ランチョンセミナーとしては初日に島津製作所の松尾英一先生に「脂質 MS イメージングの生体試料応用例のご紹介」、二日目にはエービーサイエックス社の下津佑樹先生に「最新の LC/MS/MS システムを用いた脂質分析ワークフローの紹介」、東大薬学部の河野望先生に「超高感度リピドミクススの可能性」の演題で、最先端の質量分析技術のご紹介をして頂きました。この二社には例年ランチョンセミナーのご協賛を頂いており、心より感謝申し上げます。

懇親会は初日の総会終了後に開催し、154名もの参加を頂きました。「脂質生化学会は懇親会がメインイベント」との某先生のご発言通り、大変な盛り上がりを見せ、楽しい時間を過ごすことができました。また、前回の静岡大会から始まった優秀発表賞を今大会でも企画し、厳正な審査を経て若手研究者2名、学生5名を表彰することができました。

本学会に開催に当たっては、本当に多くの皆様方にご協力を頂きました。まず、この会場は現会長の花田賢太郎先生が2020年に計画され、コロナ禍のために紙上開催となってしまった第62回日本脂質生化学会の会場であり、花田先生が作られた計画をほぼそのまま使用させて頂くことができました。第66回実行委員長の三浦進司先生、第65回実行委員長の杉本幸彦先生には沢山のアドバイスを頂きました。プログラムの作成にあたっては東京周辺の幹事の先生方、特に庶務幹事の進藤英雄先生と事務局の橋立智美さんには大変なご尽力を頂きました。特別講演の馬場健史先生、10名のシンポジストの先生方、ランチョンセミナーをはじめ、広告やご寄付頂いた沢山の企業

の方々に心から感謝申し上げます。私の研究室のスタッフと大学院生には実際の運営にあたってもらいました。留学生が多く、コミュニケーションが心配でしたが、大きな問題もなく学会を終了することができ、研究室の強い一体感を感じることができたのは望外の喜びでした。こうした機会を頂いた日本脂質生化学会に感謝申し上げます。

懇親会での優秀発表者の表彰



第 67 回日本脂質生化学会 優秀発表者

第 67 回日本脂質生化学会では、横溝 岳彦 実行委員長により学生優秀発表者賞と若手優秀発表者賞が企画されました。審査の結果、計 7 名の優秀発表者が選出され、懇親会で表彰式がおこなわれました。

学生優秀発表者賞

武田 百佳(名古屋市立大学大学院 薬学研究科 博士課程 1年)

「胎生期視床が特徴的なホスファチジルイノシトール組成を有する生理的意義の解明」

この度はこのような素晴らしい賞を頂き、誠にありがとうございます。私は本会において、脳の一領域である視床の発達に重要な脂質分子とその合成を担う酵素を明らかにしたことを発表し、多くの先生方からご質問を頂きました。皆様に興味深いと思っていただけるような研究であると実感し、研究のモチベーションがより一層高まりました。本会では、脂質に関する様々な研究について学ぶことができ、大きな刺激を受けました。本研究はまだ発展途上であり、解明すべき課題が多く存在します。先生方からの貴重なご意見や本賞を糧に、今後も本研究を深め、より良い成果につなげられるよう努めてまいります。今後ともご指導よろしくお願いいたします。



江川 将(東京大学大学院 医学系研究科 博士過程 3年)

「sPLA₂-III の欠損は ApoE 産生マクロファージの誘導により肺線維症を改善する」

この度、第 67 回日本脂質生化学会にて学生優秀発表者賞を受賞することができ、非常に光栄です。ご指導いただきました先生方、運営に携わられた先生方に厚く御礼申し上げます。今回が本学会の初めての参加でしたが、脂質研究にどっぷりと浸かることができた二日間は大変刺激的で、格別な体験でした。私は医学部の基礎医学講義にて村上 誠 教授と脂質生物学の世界に出会い基礎研究をスタートし、臨床講義を通して線維化の「不可逆性」を学んだことで、脂質代謝という視点からこれを克服したいと考えました。道のりは長く、険しいかもしれませんが、脂質生物学・脂質疾患学の可能性を最大限に引き出す研究を展開し、広く医学に貢献できる研究者を目指します。



川合 登偉(岐阜大学大学院 博士過程 2年)

「1分子・超解像動画観察による細胞膜上におけるドメイン階層構造形成機構の解明」



この度は栄えある賞をいただくことができ、誠に光栄です。今大会では、形質膜上における膜ドメイン階層構造の形成機構について発表させていただきました。長年、議論が続けられてきた「ラフト」がどのような構造であるかの方向性を示し、シグナル伝達など形質膜を介した現象に対して、基本的な概念を確立し、貢献できることを期待しています。顕微鏡やイメージングについて右も左もわからない状態から研究を始め、鈴木健一先生の手厚いご指導の下、1つ1つ積み重ねてきた成果が評価され、今大会で表彰いただき、成長を実感しております。引き続き、研究を進め、新たな発見を発信できるよう努めてまいります。今後ともよろしく願いいたします。

小牧 草太(熊本大学大学院 博士過程 3年)

「 ω 3脂肪酸では補完できない ω 6系カンナビノイドが司る中枢機能の解析」



このたびは栄えある優秀発表賞を賜り、光栄に存じます。学会関係者の皆様、審査員の先生方、ご清聴くださった皆様に心より御礼申し上げます。本研究では、食餌中のPUFAの質が母性行動に及ぼす影響とその分子機構の解明を目的とし、MSイメージングなど多様な手法を駆使することで、その一端を明らかにすることが出来ました。育児放棄や不安亢進に陥る機序を解明することは、社会的なインパクトが大きく、ヒト産後鬱や育児不安に対する予防・治療に貢献できると考えています。本会で賜りました御助言と刺激を糧に、広い視野と貪欲な探求心をもって一層精進してまいります。

最後に、熱心にご指導くださった杉本幸彦先生をはじめ、ご協力いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

上野 亮哉(九州大学大学院 博士過程 1年)

「生理活性を発揮する新規酸化リン脂質分子の探索」



この度は第67回日本脂質生化学会において賞をいただき、光栄に思います。本学会では、生理活性を持つ酸化リン脂質分子の探索について発表させていただきました。酸化リン脂質は様々な疾患の原因分子になり得ることから、分子メカニズムの解明が創薬基盤研究に重要だと考え、日々研究に取り組んでおります。今回、私は脂質生化学会に初めて参加しましたが、脂質に関する最先端の研究や多くの新たな知見に大変心を打たれました。また、発表の際には、先生方から様々なご意見をいただき、脂質研究への理解が深まりました。今後も、最新の

成果を発表できるよう、研究を邁進して参ります。引き続き、何卒よろしくお願い申し上げます。

若手優秀発表者賞

山本 将大（九州大学 助教）

「脳内非神経細胞リポドームカタログの構築」



本大会では、脳を組織する多様な細胞種のうち特にアストロサイト/ミクログリア/オリゴデンドロサイトといったグリア細胞のリポドームをカタログ化し、発達期から加齢期にかけた変化や無菌飼育の影響、遺伝子改変による変化などさまざまな視点から解析を進めた成果を発表いたしました。普段は神経科学系の学会に参加することが多いですが、脂質生化学の専門家の先生方にご好評いただき、大変光栄に存じます。今回の受賞を励みに、神経系組織を構成する各細胞種がどのような脂質特性を有するのか（変化するのか？）、その生物学的な意義について明らかにする”Neuro-Lipidology”研究を開拓したい所存です。改めまして、この度は素晴らしい機会をいただき心より御礼申し上げます。

近江 純平（東京大学 助教）

「ホスファチジルセリンの合成系による膜受容体シグナルの制御」



私はポストクになって初めて脂質生化学分野に参加し、以来6年間、一貫してPSの合成酵素の意義に興味を持って研究を進めてまいりました。本酵素を同定された偉大な先生方もいらっしゃる日本脂質生化学会におきまして、このような栄えある賞をいただきましたこと、大変光栄に存じます。本研究はPSの合成系が他のリン脂質クラスの代謝にまで影響を及ぼし、ひいては膜受容体のシグナル強度を調節することを明らかにしたものであります。私にとっては脂質代謝の複雑性を実感した研究であり、本研究を通じて脂質研究の奥深さにすっかり魅了されてしまいました。今後もオリジナルな脂質研究を続けられるように精進してまいります。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

第 67 回日本脂質生化学会に参加して

東北大学大学院 農学研究科
修士課程 2 年 佐藤遙佳

2025 年 6 月 9-10 日にタワーホール船堀で行われた、第 67 回日本脂質生化学会に参加させていただきました。私にとって初めての学会発表であったため非常に緊張し、ホテルの部屋でテレビのリモコンをマイクに見立てて何度も発表練習をしたことを今でも鮮明に覚えています。

発表会場は私が想像していたよりもずっと広く、一段と緊張が増しました。他の学生のみなさんの発表を聴き、話し方、パワーポイントのレイアウト等の素晴らしさに圧倒されながら発表の順番を待ちました。

私は「光が涙液脂質に及ぼす影響」という演題で発表させていただきました。練習通りに発表できていると思っていたところ、まとめスライドの途中で発表終了のベルが 2 回鳴りとても焦りましたが、なんとか発表を終えることができました。涙液の脂質酸化というユニークさを伝えることができたのだろうか心配でしたが、発表後には多くの先生方から質問や感想をいただき、嬉しく感じました。その中で思うように受け答えができなかった場面もあったので、日々の研究や勉強を通じて知識を積み重ねていきたいと思います。これから取り組むべき実験が明確になり、今後の研究では、涙液に含まれる脂質だけではなく眼細胞に対する光酸化について研究を進め、将来的には眼の健康を守る知見を見出したいと考えています。

初日の学会発表を終えた後は懇親会に参加し、研究を進めるうえで参考にさせていただいた論文の著者である先生と直接お話しする機会をいただき、大変貴重な時間となりました。また、他大学の学生のみなさんと交流する中で、研究に対しての熱意に触れ大いに刺激を受けました。

2 日目に聴講した複数の発表や本学会を通じて、「脂質」という分野が食品から生体に至るまで多様かつ奥深い領域であることを改めて実感しました。脂質を研究する者としてこの分野の知識をさらに深めていきたいと思いました。そして、また脂質生化学会で発表できることを目指し精進します。

最後になりましたが、この場をお借りして実行委員長の横溝先生をはじめ、学会運営に携わっていただいた全ての皆様に感謝申し上げます。

The 65th International Conference on the Bioscience of Lipids (ICBL)に参加して

順天堂大学大学院 医学研究科 生化学・細胞機能制御学講座
安藤 美沙

2025年9月21日～9月24日の4日間、オーストリアのインスブルックで開催された第65回国際脂質生物学会議（The 65th International Conference on the Bioscience of Lipids 2025, 65th ICBL）に参加しました。インスブルックは1964年と1976年に冬季オリンピックが開催されたことでも有名な都市です。信号機のデザインにもその名残がありました。

会場はインスブルック大学の構内にある Ágnes-Heller-Haus の大ホールで、本大会のメインテーマは“Alpine Air & Lipid Flare ~ Igniting Innovation in Lipid Research ~”でした。今回は、“The role of peroxisomes in lipid metabolism”、“Lipids in clinical and translational research”、“Inborn errors in lipid metabolism”、“Lipid hydrolysis in health and disease”、“Biophysics of Lipid Membranes”、“Lipid Modification and Cell Death



インスブルックの街並み

奥に見えるのはノルトケッテ連峰です



インスブルック大学近くの信号機

スキーとスノボのかわいいデザインです



会場の Ágnes-Heller-Haus

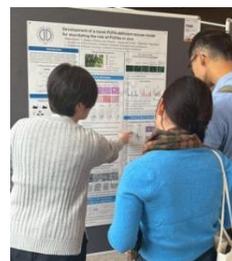


開始前の会場内の様子

どの席からも画面がよく見えました

Regulation”、“Lipid diversity and membrane remodeling”の7つのトピックで構成されていました。どれも興味深い内容でしたが、中でも私の印象に残った演題は、Alberta 大学の Richard Lehner 先生の“Regulation of hepatic fat metabolism by endoplasmic reticulum localized lipases”というご講演です。代謝機能障害関連脂肪性肝疾患（MASLD）に関する内容であり、小胞体に局在する Ces1d や Ces1g などの脂質加水分解酵素が肝臓の脂質代謝に大きな役割を果たしていることが明らかとなった、という研究内容でした。私の研究にも MASLD は関わっており、自身の研究を深めるためにも知っておかねばならない内容が沢山詰まった、学ぶことの多いご講演でした。他の先生方のご発表も、脂質という同一分野の研究ながら詳細な研究内容は多岐に渡り、脂質研究の面白さや奥深さを再認識することができました。

私は学会 3 日目のポスターセッションにおいて、「Development of a novel PUFA-deficient mouse model for elucidating the role of PUFAs in vivo」というタイトルで発表させていただきました。PUFA の未知な機能を解明するために有用な新たな PUFA 欠乏モデルマウスを作製し、解析を行なったという内容です。慣れない英語での発表は大変ではありましたが、たくさんの研究者の方々からご意見をいただくことができ、とても勉強になりました。



ポスター発表



イン川沿いの街並み
どこを撮っても絵になります



宮廷教会でのオルガン演奏
心に染み入る荘厳な演奏でした



Conference dinner
演奏でディナーを盛り上げてくれました♪

学会 3 日目の午後の Excursion では、地元のガイドさんによるインスブルックの歴史的背景の説明を聞きながら市街を観光し、その後、宮廷教会でオルガンの生演奏を聴きました。そしてこの日最後の Conference dinner では、民族衣装に身を包んだ方々による演奏を聴きながら、他大学の先生方や大学院生の方々との交流を楽しみました。

この学会に参加したことにより、脂質分野の研究の理解を深めることができたのはもちろんのこと、同じ分野を研究している“仲間”が世界中にいることを実感することができたのは何よりも嬉しい経験でした。と同時に、国際学会という場でも活発な議論ができるようになりたい、自身の研究も皆様のレ

ベルに近づけるようにより一層励みたい、という気持ちが大きくなりました。この経験を糧に、今後も勉学に研究に邁進していきたいと思います。

最後に、このような素晴らしい学会に参加する機会を与えてくださった横溝岳彦先生と李賢哲先生、横溝研の皆様、また、このような執筆の機会をいただいた日本脂質生化学会の先生方に、この場をお借りしまして深く御礼申し上げます。



Top of Innsbruck!

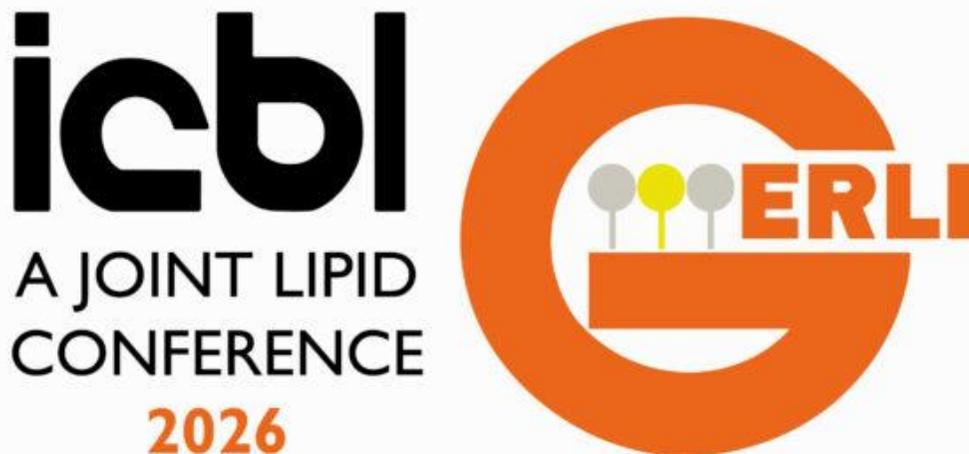
標高 2300m! 横溝先生は初めから登山靴でした!

第 66 回国際脂質生物学会議 (ICBL) のご案内

順天堂大学医学部生化学第一講座 横溝 岳彦

第 65 回国際脂質生物学会議 (ICBL) は、インスブルック大学の Katrin Watschinger 教授と Markus A. Keller 教授を実行委員長として、2025 年 9 月 21-24 日に、オーストリア・インスブルック (Ágnes-Heller Haus) で開催されました。チロルアルプスの山に囲まれた素晴らしいロケーションで、活発な討論が行われました。参加した安藤美沙さんの報告が本サーキュラーに掲載されていますので、ぜひお読みください。

第 66 回の ICBL は、GERLI (Group of Studies and Research on Lipids, France) との合同の学会として、2026 年 9 月 21-24 日にフランスのボルドーで開催されます。



2026 年 1 月 6 日の段階では、参加登録のホームページは公開されていませんが、公開後は以下からアクセスできるようになると思います。

ICBL のホームページ <https://www.icbl.info/>

第 66 回 ICBL の案内 <https://www.gerli.com/icbl-gerli-lipid-conference-2026/?lang=en>

なお、2027 年以降の ICBL の開催予定は現段階では未定ですが、2027 年の可能性として、シドニー (オーストラリア) での開催が検討されています。

第 18 回国際エイコサノイド会議のご案内

順天堂大学医学部生化学第一講座 横溝 岳彦

2026年8月10日-12日に、米国ワシントンDCのNIHキャンパスにおいて、第18回国際エイコサノイド会議が開催されます。この会議は、Eicosanoid Research Foundation(ERF)が主催する国際学会で、今回はERFとWinter Eicosanoid Conferenceとの合同の学会になります。この学会では生理活性脂質の生合成と生理機能に関する発表に加え、多価不飽和脂肪酸生合成系路や膜リン脂質、スフィンゴ脂質の代謝や生理機能についても幅広い討論が行われています。2025年10月に開催が予定されていましたが、アメリカの政治の問題でNIHキャンパスが閉鎖されてしまったため、延期されての開催となります。

ERFメンバーが5名の米国人、1名のスウェーデン人と2名の日本人(私と理化学研究所/慶應大学の有田誠先生)で構成されていることから分かります。本領域への日本人研究者の貢献は高く評価されています。毎回、小野薬品株式会社から多額のご寄付を頂いており、これを原資として日本で行われた研究発表を対象とする Travel Award (旅費援助)が準備されています。

以下は大まかなスケジュールです。

2026年6月6日 演題登録締め切り

2026年8月1日 事前登録締切

既にメーリングリストの登録は始まっていますので、ご興味のある方は以下からご登録ください。

<https://bioactivelipids.org/>

前回(2012年ニューオリンズ学会)での、ONO Travel Award の受賞者



膜機能解析を目指したリン脂質の化学合成

愛媛大学大学院農学研究科

安部 真人

この度は、日本脂質生化学会の幹事にご推薦いただき、誠に光栄に存じます。微力ではございますが、学会のさらなる発展に貢献できますよう尽力してまいります。何卒よろしくごお願い申し上げます。ご挨拶と自己紹介を兼ねまして、これまで私が携わってきた研究について簡単にご紹介させていただきます。

私は 2002 年に京都大学農学部生命機能科学科でミトコンドリア呼吸鎖酵素の反応機構をご専門とする三芳秀人先生のもとで呼吸鎖複合体Ⅲ（シトクロム c 還元酵素）の阻害剤スティグマテリンの同位体ラベルを行いました。同大学院に進学し、呼吸鎖複合体Ⅰ（NADH 脱水素酵素）の阻害剤アセトゲニン類の構造活性相関研究に従事し、2007 年に学位を取得しました。当時はウシ心筋から遠心分画してミトコンドリア膜を回収して活性測定を行っており、阻害剤合成の日々のゴールとして阻害活性を測定することが楽しみでした。また、スティグマテリンはアセチル CoA から誘導される脂質誘導性成分であり、アセトゲニン類は典型的な誘導脂質に分類されます。このため、学生時代から脂質に関連する全合成を経験してきたこととなります。さらに 1 年間で博士研究員として出身研究室に在籍したのちに、2008 年から九州大学先端物質科学研究所の新藤充先生のもとでミトコンドリア ATP/ADP キャリアの阻害剤ボンクレキンの機能性解析と化学合成に取り組みました。機能解析では自由なチャレンジを許していただき、同時に化学合成では幅広い視野と知見に触れる機会になりました。いわば言葉が通じる留学と言って良い貴重な経験だったと感じております。2009 年の後期に再び出身研究室の助教として採用され、本格的にミトコンドリア脂質の化学合成を中心とした研究を始めました。ミトコンドリア研究に楔を打ちたいという野心もあり、当時合成例がほとんどなかったカルジオリピンを合成標的に据えました。先行例では飽和脂肪酸またはオレイン酸しか成功例がなかったなかで、リノール酸での天然型カルジオリピンの全合成に成功したことは現在も私にとっての基盤技術として活用している手法になります。2011 年には光反応性官能基ジアジリンとクリックタグを組み込んだカルジオリピンの光標識プローブを発表し、その後も自身の手でカルジオリピンによる標識実験を行いました。しかし、現在ほどの解析手法がなかったために思うような成果は得られませんでした。一方で、構築した合成カルジオリピンのライブラリーを活用したアプローチに取り組むこととしました。このときの標的はカルジオリピンのリモデリングを担うトランスアシラーゼであるタファジンの基質特異性を明らかにすることに設定しました。ここでは、カルジオリピンの化学合成をフル稼働し、アシル鎖の異なる系統的な類縁体を作り分けてリポソームとして準備する

ことにしました。同時に、HPLC 分析も新たな系を検討して側鎖構造の異なる分子種を精度よく分離できる定量系を作成しました。その結果、酵母型のタファジンには不飽和脂肪酸をリゾカルジオリピンに優先的に導入する選択性を見出すことができました。従来はランダムなスクランブラーゼのように振舞う可能性が指摘されていたことを考えると、興味深い知見となりました。

2018 年に新たに自身の研究室を開く機会を得て現職となり、脂質の化学合成をメインテーマに展開しています。同研究室ではこれまでに、カルジオリピンを皮切りに各種リン脂質のデザイン合成やプローブ化を行ってきました。脂肪酸部には PUFA や酸化脂肪酸、リゾ化も対応できるようになり今後の夢が広がっています。最近ではスフィンゴ脂質やその他の新規脂質にも挑戦しています。また、現在は英国 University College London の化学科にて酵素多段階合成の専門家である H.C.Hails 教授との国際共同研究による研究留学を実施しております。2022 年と 2025 年度にそれぞれ約半年の滞在を実施するものであり、合成手法のさらなる発展のみならず、国際的な共同研究の基盤整備を目指しています。

今後も脂質の化学合成を軸とした研究展開を通じ、脂質生化学の分野に貢献していくことができれば幸いに存じます。今後ともご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

脂質生化学が繋ぐ未知とサイエンスの未来

香川大学医学部生化学講座
岩部 美紀

この度は、日本脂質生化学会の幹事にご推薦を賜り、誠にありがとうございます。長い歴史と伝統を持つ本学会の運営に携わる機会を頂き、大変光栄に感じると共に、身の引き締まる思いでございます。微力ながら、本学会のさらなる発展のために全力を尽くし、脂質生化学研究の魅力を次世代へ繋ぐ一助となるよう努めてまいります。

私が研究者を志したのは、香川県立高松高校在学時でした。進行中だったヒトゲノムプロジェクトの壮大さに魅了され、感動したことを覚えています。当時、生物の先生から「実験には向き不向きがある」と教わり、向いていなければやめればよいと気軽な気持ちで理学部生物学科に進学しました。初めてピペットマンを握ったのは、ちょうど30年前のことです。酵母を対象に金属の耐性機構の解明を目指す中で、実験の楽しさを知り、よりヒトに近い研究を行いたいと考え、大学院博士課程は、香川医科大学（現・香川大学医学部）に進みました。ここで生化学・分子生物学の基礎を学び、カルシウム結合タンパク質の新規機能探索に没頭しました。

学位取得後は、さらに治療に結びつくような個体レベルでの疾患研究に取り組みたいと考え、2004年に東京大学大学院医学系研究科糖尿病・代謝内科に移りました。当時の教授であった門脇 孝先生（現・虎の門病院院長、日本医学会長）の門を叩き、ポスドクとして仲間に加えて頂きました。以後20年にわたり、現教授である山内 敏正先生をはじめ、数え切れない諸先生や仲間と共に、糖尿病をはじめとする代謝性疾患の分子メカニズムの解明や創薬を目指し、生命科学研究に邁進してきました。

実験は、本当に楽しいものです。どんなに小さなことでも世界で初めて自分が知り、自らの手で検証できる、様々な大きさの達成感の積み重ねが推進力となります。画期的な発見やセレンディピティが毎日訪れるわけではなく、未知への扉が開かれる瞬間はごく限られています。実験は、思考と現実とを繋ぎ、私達を真理へ導く唯一の手段なのです。

人生は、予測不能であるがゆえに実に興味深いものです。例えば、10年前の2015年、多くの諸先生や仲間と共にアディポネクチン受容体（AdipoR）の立体構造を世界で初めて明らかにできました。そして、今、糖尿病の鍵分子であるAdipoRが、糖・脂質・エネルギー代謝の制御に加え、脂質に対する加水分解活性を有する新しいタイプの膜受容体であることが明らかになりつつあり、まさか脂質生化学へと繋がるとは思ってもみませんでした。思えば、40年前の1985年に阪神タイガースが初の日本一となり、友人と歓喜していたあの頃の私には、今の姿など想像もできませんし

た。振り返ると、地道な努力の積み重ねと偶然の出会いが、思いがけない未来を切り拓いてきたことを実感し、これから先も楽しみでなりません。

サイエンスの在り方も変容を遂げています。2025年のNatureの記事では、「画期的・革新的な発見の減少」が論じられ、多くの研究者が共感したのではないのでしょうか。かつては遺伝子改変マウスの表現型を示すことで十分、一流誌に掲載されましたが、現在は、多角的手法と大規模データを統合した総合力が求められます。まさにチームサイエンスの時代です。

しかし、昔も今も変わらないものがあります。それは、実験の面白さがもたらす尽きぬ喜びと、仲間とのディスカッションを重ねる中で育まれる知の創造です。今、私は研究者としての原点である香川大学に再び身を置いています。学生との触れ合いもさらに増し、多彩な感性に刺激を受けながら、充実した日々を過ごしています。研究者としての向き不向きを考える余裕はなく、今も「画期的・革新的発見」を目指し、未知という名の船に乗って航海を続けています。サイエンスの探求には終わりがなく、その無限の広がりこそが最大の魅力です。

日本脂質生化学会は、学術的発展は勿論のこと、研究者相互の理解と親睦を深めることを目的とした、他に類を見ない温かく素晴らしい学会です。入会して間もない私ですが、これまでご指導を頂いてきた先生方が本当に多く、改めてその懐の深さと温かさを感じております。皆様と共に未来を築き、サイエンスの魅力を本質的に理解できる医師・研究者の育成、健康長寿の実現、そしてサイエンスの未来に貢献していきたいと考えております。今後ともご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

脂質生化学と脂質異常症臨床との懸け橋

順天堂大学 医療科学部 臨床検査学科
小倉 正恒

この度は日本脂質生化学会の幹事にご推薦いただき、大変光栄に存じます。微力ではございますが、日本脂質生化学会に少しでも貢献ができるよう精進してまいります。この場をお借りして、自己紹介と今までの研究の紹介をさせていただきます。

私は1998年に防衛医科大学校を卒業し、海上自衛隊医官として複数回広島県江田島市で勤務、東日本大震災での災害派遣などを経験させていただきました。入学前は半分文系だったこともあり精神科志望、病院実習で向いていないことを悟り内科医に変更しました。卒後、最初に出会った上級医が素晴らしい総合内科医（ジェネラリスト）であり、その先生に憧れて入局したグループがたまたま脂質代謝グループで、決して脂質に興味があったわけではありませんでした。

何となく入校した防衛医科大学校医学研究科（大学院）の2007年からHDLによるコレステロール搬出反応についての研究に従事しました。学位論文ではコレステロール搬出を担うABCトランスポーターがユビキチン・プロテアソーム系で分解され、プロテアソーム阻害薬が*in vitro*および*in vivo*でコレステロール搬出反応を促進することを明らかにし、大変幸運なことに日本動脈硬化学会若手研究者奨励賞を頂戴しました。この研究により、海上自衛隊医官ではなく脂質代謝の臨床と研究の道に進むことを決め、防衛省を退職しました。

2013年10月に国立循環器病研究センターに異動し、臨床では家族性高コレステロール血症（FH）の患者さんを多く診療することができました。上司の斯波真理子先生から「FHの研究だけをしていたら、斯波の二番煎じにしかならないから、小倉色を出しなさい」という大変ありがたい指導を受け、ヒトHDL側のコレステロール搬出能を測定する実験系を確立しました。スタチン治療中のFH患者（搬出能はLDL-C低下治療後の残余リスクか？）をはじめ、さまざまな疾患の患者や住民コホートの検体の搬出能を測定し、搬出能がHDL-C値よりも疾患の重症度を反映することを明らかにしてきました。しかし、これらの研究により、搬出能測定の臨床的課題（標準化できないこと、搬出能自体を治療標的にできないこと）に気づきました。そこで、搬出能低下と疾患重症度の共通分子Xを見つければ、臨床検査として標準化可能であり、X阻害薬という新しいクラスの創薬につながれると考え、現在、細々と研究を続けております。

FHについては、診断基準の一つであるアキレス腱肥厚の評価法として、超音波検査による正確な測定法とその臨床的意義に関する研究にも従事し、2022年版のFH診

断基準に我々が設定したカットオフ値を採用していただきました。FHの診断率が低く、適切な脂質低下治療と家族スクリーニングが不十分な現状を打破するために、日本動脈硬化学会や日本循環器学会のガイドライン執筆、厚労科研費・難治性疾患政策研究事業「原発性高脂血症に関する調査研究班」で脂質難病に関する政策研究も推進しています。

脂質異常症診療をしていて痛感するのは、血中のコレステロールやトリグリセライドのコントロールだけでは解決できないことが多いということです。脂質生化学をより深く勉強するとともに、先生方との交流を通じて、臨床への懸け橋になることで脂質生化学会への貢献につなげ、その結果、患者さんの生命予後やQOLの改善に貢献したいと考えております。引き続きご指導の程よろしくお願い申し上げます。

脂質代謝を制御するメディエータを適時・適所に配置するトランスポーター

高崎健康福祉大学薬学部
中西猛夫

このたびは日本脂質生化学会の幹事にご推薦いただきまして、誠に光栄に存じます。微力ではございますが、本学会の更なる発展に貢献できますよう尽力いたします。私と脂質研究との出会いには少し紆余曲折がございます。ご挨拶を兼ねまして簡単にこれまでの経緯をご紹介させていただきます。

私は、1994年に京都工芸繊維大学繊維学部(生物工業化学コース)を卒業後、薬理や薬物の体内動態に興味を持ち、金沢大学大学院薬学研究科に進学、1999年に同大学院自然科学研究科を修了、博士(薬学)を取得しました。大学院では、当時生物薬剤学において先駆的なご活躍をされていた薬学部・製剤学教室 故 辻彰先生に師事し、膜タンパク質オリゴペプチドトランスポーター(PEPT1)の機能や発現を解析し、PEPT1が薬物の消化管吸収の決定因子として重要であることに関心を抱き、薬物動態学の分野から研究界に入りました。日本学術振興会の特別研究員を経て、米国ジョージア医科大学(現オーガスタ大学)へ留学し、博士研究員として故 Frederick H. Leibach 先生に師事、当時押し寄せてきた遺伝子クローニングの波に乗り、アミノ酸トランスポーターの遺伝子(SLC38A2、38A3、38A5 など)の単離・同定、機能解析に夢中になり、どんどんと分子生物学に心を奪われていきました。生理から病理に興味を持ち始めたのもちょうどその頃で、メリーランド大学グリーンバウムがんセンターへと異動し、多剤耐性を獲得した癌細胞に強く発現する薬物排出トランスポーター(ABCG2)を同定した Douglas D. Ross 先生の研究室で、リサーチアソシエートとしてがん幹細胞に発現するトランスポーターの機能解析など、分子腫瘍学の観点からトランスポーター研究に没頭しました。その後、2008年12月に金沢大学医薬保健研究域薬学系に准教授として着任し、薬物動態学教室で玉井郁巳先生のご指導のもと脂質メディエータである PGE₂ トランスポーターの研究を開始しました。PGE₂ に高い親和性を持つ PGE₂ トランスポーター(SLCO2A1) 欠損マウスの作出を出発点として、SLCO2A1 の機能解析を推進しました。SLCO2A1 は炎症部位で盛んに合成される PGE₂ を細胞内へ取込み、15-PGDH による酸化的不活化を促進することを動物モデルで示し、PGE₂ のシグナル終結システムとして炎症反応を制御する生命維持に必須なタンパク質であることを明らかにしました。この成果をもって、私は2014年に大阪で開催された第56回日本脂質生化学会に初めて参加しました。それ以来、本学会では PGE₂ 膜輸送や脂肪肝でのミトコンドリアキャリアに関する研究成果を報告してきました。今後は、生化学領域へ薬物動態学的な視点を導入したアプローチで、炎症のカギ物質の動態とその制御因

子を解析することで、脂質代謝障害の機序解明に励みたいと存じます。引き続きどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

糖脂質研究の歩みー自然免疫と感染制御に関わる探求ー

順天堂大学医療看護学部
大学院医療看護学研究所
大学院医学研究科環境医学研究所
中山仁志

この度、日本脂質生化学会の幹事にご推薦いただき、誠に光栄に存じます。脂質生化学という多様な可能性を秘めた学術領域において、微力ながら貢献して参る所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は一貫して、自然免疫・感染・パターン認識受容体・スフィンゴ脂質をキーワードに、研究を展開してきました。研究の原点は、岩渕和久教授のご指導のもと大学院博士課程時代に取り組んだスフィンゴ糖脂質のラクトシルセラミド (LacCer) による脂質ラフト形成と免疫応答の関係性の解明でした。脂質ラフトという微細な膜構造が、自然免疫細胞のシグナル伝達に果たす役割に魅了され、以来、脂質と自然免疫のクロストークを軸に研究を深めてきました。また、岩渕教授のご指導のもと、自然免疫における LacCer の機能解明を追究する中で、ミラノ大学の Sandro Sonnino 教授、Alessandro Prinetti 教授との共同研究にも参画することができ、C24-LacCer の機能解析に携わる機会を得ました。脂質の構造と免疫応答の関係をめぐる国際的な議論は、今でも研究の原動力となっています。また、順天堂大学客員教授でもあられる平林義雄先生には、環境医学研究所での活動を通して、研究の方向性だけでなく、様々な示唆に富むご助言をいただきました。この場を借りて、これまでご指導いただいた諸先生方に心より御礼申し上げます。

その後、抗酸菌による好中球への感染機構の解明に取り組み、抗酸菌の細胞壁を構成する糖脂質のリポアラビノマンナン (LAM) に着目し、その感染機構については、LAM が LacCer のマイクロドメインへ結合することが重要であり、結核菌や非結核性抗酸菌 (NTM) のような病原性抗酸菌が細胞内に寄生するために必要な機構であることを明らかにしました。その後 LAM に対する抗体の開発、また、それを利用したワクチン開発を志向し、抗体機能解析を通して、感染制御の新たな分子基盤の理解を目指してきました。現在は、抗体の構造と機能の多様性に着目し、細胞内寄生を制御するような抗体の開発を目指しています。また、抗体を起点とする細胞内情報伝達機構とスフィンゴ脂質代謝とのクロストークの解明にも取り組んでおり、これらの研究を通して脂質生化学分野へのさらなる貢献を目指しています。

現在は、順天堂大学大学院医学研究科環境医学研究所内にて「感染制御メカニズム解明グループ」を立ち上げ、独立した研究グループとして活動しております。抗酸菌の糖鎖モチーフを抗原とする抗体の機能解明に注力するとともに、自然免疫における

グラム陰性菌・陽性菌の感染機構、乳酸菌との共生機構の解析にも取り組んでいます。脂質生化学の知見を感染制御へと橋渡しすることで、微力ながら社会貢献に繋げてまいりたいと存じます。

今後とも、日本脂質生化学会の活動を通じて、分野横断的な連携と新たな学術展開に貢献して参ります。皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

脂質研究から挑戦する脳血管の未説明問題

東京慈恵会医科大学 分子生物学講座
柳田 圭介

この度は日本脂質生化学会の幹事にご推挙いただきまして、身に余る光栄に存じます。微力ではございますが、日本脂質生化学会のさらなる発展に貢献できるよう尽力してまいり所存です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。この場をお借りして、これまでの私自身の経歴および研究について、簡単に紹介させていただきます。

私の脂質研究との出会いは、東京大学医学部3年生時のフリークオーター（研究室配属）でありました。当時は研究で身を立てる将来など全く考えていなかったのですが、清水孝雄先生（現 微生物化学研究所研究所長）、石井聡先生（現 秋田大学教授）のご指導のもと、どんどんと研究の面白さにはまり込んでいきました。一方、病院実習が始まると思い切って研究に打ち込むことができない日々には不自由さを感じ始めました。そのような折、当時准教授であられた横溝岳彦先生（現 順天堂大学教授）にも背中を押していただき、研究を楽しむ半ばモラトリアムの延長として PhD-MD コースを利用し大学院に進学いたしました。学位取得後に2年間助教を務めた後に、復学し卒業もいたしました。「臨床にはいつでも行けるからもうちょっとだけ研究を」と延長しているうちにすっかりと20年近くが経ち、現在に至っております。

東京大学では新規リゾホスファチジン酸受容体の同定やそのシグナル伝達の解析、欠損マウスを用いた生理機能の解明に取り組んでおりました。リゾリン脂質研究を進める中、国際学会で Timothy Hla 先生のご発表、特に研究テーマへの哲学や考え方に感銘を受け、2012年より米国 Weill Cornell Medical College および Boston Children's Hospital にて Hla 先生のもとで血管機能におけるスフィンゴシン1リン酸の機能研究を進めました。「君はわりとのんびりしていると聞いているから、むしろ competitive な分野をテーマにするといい」と言われて取り組むことになったのが脳血管の研究で、今もなお私の研究の中心テーマであります。米国では血液脳関門や血管の組織特異性獲得におけるスフィンゴシン1リン酸の役割について研究を進め、脂質生化学というよりはどちらかという血管生物学のコミュニティで研究活動することとなりました。この間に自身の興味やフィールドが血管生物学特に脳血管機能へとシフトし、帰国後の将来の研究課題として一旦脂質から離れて「脳血管のユニークな機能がいかんにして創出されるか」という脳血管のみ解決問題に取り組むことを決意いたしました。このように思い切って「脱」脂質を掲げたのですが、さっそく解析をはじめると脳血管内皮細胞に特徴的に発現する遺伝子の多くが脂質代謝関連遺伝子であることが明らかとなりました。脳血管の謎を解く鍵は実は脂質にあるかもしれないということで、

前言撤回し脳血管の脂質代謝やその特殊性についてとことん追求する決意を固めました。どうやら脂質は私を離してくれないようです。

さて本格的に様々な脂質を解析するとなると、その技術とノウハウが必要となります。幸いにもちょうどそのタイミングで清水先生にお声がけいただき、2019年より国立国際医療研究センター（現 国立健康危機管理研究機構）で清水先生、進藤英雄先生のご指導のもと、リピドミクスを一から学びながら「脂質から脳血管の謎を解く」第一歩を踏み出す機会をいただきました。その後、ご縁があり2024年からは東京慈恵会医科大学分子生物学講座にて研究室を主宰する機会をいただきました。諸先輩方やその他多くの方々のお力添えにより研究室の整備も終わり、「脂質から脳血管の謎を解く」研究がよいよ本格的にスタートいたします。まだまだ勉強中の身でございますので、先生方には引き続きご指導賜れましたら幸いに存じます。

振り返りますと、将来研究で身を立てることなど想像もしていなかった自身がこのようにまだ童心で研究を楽しんで生活できるのも、脂質研究との出会いそして脂質生化学会の諸先生方の温かい励ましがあったからこそと痛感しております。昨年大学に移りましたが、研究に興味をもってくれた医学部学生さん2名がさっそく研究室で研究・実験を始めてくれています。学生当時の自身を思い出しながら、脂質研究の面白さを次世代に繋いでいくことで脂質生化学会に少しでも恩返しをさせていただければと思っております。最後になりましたが、本学会のさらなる発展のために鋭意努力してまいりたいと思いますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

ステロールの構造的・機能的多様性に魅せられて

東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻
山内 祥生

この度は、日本脂質生化学会の幹事にご推薦いただき、大変光栄に存じます。微力ではございますが、日本脂質生化学会のさらなる発展に貢献できるよう尽力していく所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。僭越ではございますが、ご挨拶と自己紹介を兼ねて、これまでの経歴と研究について紹介させていただきます。

私は、カイコなどの鱗翅目昆虫を材料に昆虫体液中で脂質を輸送するリポタンパク質 (lipophorin) に関する研究を卒論研究から修士課程まで行なっておりました。修士課程修了後、民間企業に就職しましたが、一念発起し、1年後に名古屋市立大学大学院医学研究科の博士課程に入学し、研究の道を志しました。名古屋市立大学では生化学第1講座にて、横山信治教授のご指導のもと、日本学術振興会特別研究員制度のサポートを受けながら、ABCA1を介したHDL産生制御機構に関する研究を行い、2003年3月に博士(医学)の学位を取得しました。学位取得して10日後には米国ニューハンプシャー州の片田舎(ボストンから約200km北東に位置するHanover)に引っ越し、Dartmouth Medical School(現 Geisel School of Medicine at Dartmouth) 生化学科のTa-Yuan Chang教授に師事し、American Heart Association Postdoctoral Fellowshipと日本学術振興会特別研究員制度のサポートを受けながら細胞内コレステロール輸送に関する研究に3年間従事しました。その後、2006年7月から熊本大学大学院医学薬学研究部細胞病理学分野(竹屋元裕教授)助手に、2007年1月から名古屋大学大学院医学系研究科生化学第2講座(古川鋼一教授)助手(同年4月から助教、2013年より講師)に採用され、医学分野の複数の研究室にて脂質研究に参加する機会をいただきました。名古屋大学では、これまで研究対象としていたコレステロールとは若干距離を置き、スフィンゴ糖脂質の視点からガンや神経変性疾患に関する研究を展開しました。メラノーマ抗原ガングリオシドGD3によって惹起されるシグナルがSREBPを活性化し、コレステロール合成を亢進することでメラノーマ細胞の悪性形質が増強されることを示し、スフィンゴ糖脂質とコレステロールの意外な関係を明らかにできました。これまで行なってきたコレステロール研究のバックグラウンドを生かすことができ、多様な分野での研究経験の重要性を実感しました。

その後、縁あって、2016年7月より、同年4月に設置された東京大学大学院農学生命科学研究科初の社会連携講座である栄養・生命科学社会連携講座の特任准教授に着任し、親講座にあたる応用生命化学専攻食品生化学研究室の佐藤隆一郎教授(現特任教授)と研究をご一緒する機会を得ました。社会連携講座では出資企業との共同研究に主眼が置かれているため、新たに骨格筋を対象とした研究を開始しました。2019年

4月には、准教授として食品生化学研究室に異動し、2024年12月より、佐藤隆一郎先生退任後の食品生化学研究室を引き継いでおります。当研究室では現在、骨格筋におけるメバロン酸経路や細胞外小胞（コレステロールに富む小胞）に関する研究とコレステロールを中心とした脂質の代謝や細胞内輸送に関する研究を主要な研究テーマとして展開しています。

これまでの研究の中で、コレステロールだけでなく、体内に極微量（コレステロールの千から数万分の一程度）しか存在しないラノステロールなどの中間体ステロールやコレステロール代謝物である酸化ステロールも研究対象となり、ステロールの構造的・機能的な多様性に興味を持つようになりました。リン脂質ほどではないかもしれませんが、ステロールにも構造的な多様性が存在します。その微細な構造変化によって発揮される機能も異なってきますが、ステロールの機能的多様性や構造的多様性を制御する分子機構は不明な点が多く残されています。また、メバロン酸経路は日本人にゆかりのある代謝経路の一つです。遠藤章先生のスタチン発見だけでなく、1956年には東京大学農学部農芸化学科の田村學造先生によって火落酸としてメバロン酸が発見されました。メバロン酸経路は様々な病態で重要な役割を果たしており、2023年には肢帯型筋ジストロフィーの原因遺伝子の一つとして、HMG-CoA還元酵素が同定されました。今後は、メバロン酸経路やステロール分子群に着目した基礎研究とともに、農芸化学分野の食品科学研究の発展を目指し、ヒトiPS細胞や動物モデルを駆使してBench（実験台）とTable（食卓）を橋渡しするTranslational Food Scienceを展開していきたいと考えております。

これまで根無し草のように国内外を転々としてまいりましたが、今後は腰を落ち着けて研究に取り組むとともに、後進の育成にあたっていきたいと考えております。脂質生化学研究の発展に貢献できるよう努力していく所存ですので、会員の皆様におかれましては、今後ともご指導賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

会の活動状況

1 第 67 回日本脂質生化学会・研究集会の開催

実行委員長 : 順天堂大学医学部生化学第一講座 横溝 岳彦 教授
日時 : 令和 7 年 6 月 9 日 (月)、10 日 (火)
場所 : 船堀タワーホール
演題数 : 特別講演 1、シンポジウム 2、ランチョンセミナー 2、一般演題 79

2 令和 7 年度日本脂質生化学会・幹事会、総会の開催

令和 7 年 6 月 9 日 (月) に幹事会と総会が、第 2 会場 (瑞雲)、第 1 会場 (小ホール) にてそれぞれ開催された。

総会次第

花田賢太郎会長の挨拶の後、以下の議事が進行された。

- (1) 令和 6 年度事業ならびに決算報告
令和 6 年度の事業報告ならびに決算報告がなされ了承された。
- (2) 令和 7 年 (第 67 回) 年大会の現状報告
横溝岳彦 大会長より大会の現状が報告された。
- (3) 令和 8 年 (第 68 回) 年大会準備状況の報告
森田真也 次大会長より大会の準備状況が報告された。
- (4) 令和 9 年 (第 69 回) 年大会実行委員長の選出
川崎医科大学医学部 松田純子教授が推薦され承認された。
- (5) 令和 7 年度事業計画ならびに予算案
令和 7 年度事業計画ならびに予算案の報告がなされ了承された。
- (6) 幹事の選出および名誉会員の推薦
 - ・ 令和 7 年 12 月 31 日任期終了予定の幹事の再任が承認された。
(令和 8 年 1 月 1 日～令和 11 年 12 月 31 日迄) (氏名は後述)
 - ・ 以下 7 名が新幹事に推薦され、承認された。
安部真人先生 (愛媛大学)、岩部美紀先生 (香川大学)、小倉正恒先生 (順天堂大学)、
中西猛夫先生 (高崎健康福祉大学)、中山仁志先生 (順天堂大学)、
柳田圭介先生 (東京慈恵医科大学)、山内祥生先生 (東京大学)、
(令和 8 年 1 月 1 日～令和 11 年 12 月 31 日迄)
 - ・ 以下 1 名が名誉会員に推薦され、承認された。
徳村 彰先生
- (7) 会則の改正
花田賢太郎会長より現在の会則の問題点とその変更内容、細則設置が提案された。
以下の会則の変更が承認された。
8 条 事務局
春恒社の住所など詳細を削除し、以下の文章へ変更
本会は会務に関する事務をおこなうために本会との間で結んだ契約の下に事務局を置くことができる。
事務局を置いた場合、庶務幹事は事務局とも連携して、会員に便宜を供する。
9 条 委員会

本会に関わる活動のために各種委員会を設置できる。各委員会に委員長を一名置く。

10条 細則

本会則に沿って本会を運営する際に必要な事項は細則に定める。細則は本会の役員が起案し、幹事会の承認をもって発効される。発効された細則は総会に報告する。

(8) 年会費の改正

花田賢太郎会長より支出削減と収入増加のための値上げについて説明があり、承認された。

支出の削減：サキュラーの冊子体作成は令和7年で終了し、令和8年からは学会 Web ページに電子ファイル掲載とする。

収入の増加：令和8年から正会員の年会費値上げ（5,000円→7,000円）。

学生会員は、年会費無料で学会参加費を2,000円値上げ。

(9) 国会図書館に寄贈した『脂質生化学研究』の電子化と公開、及び、過去版サキュラーの学会 Web ページ公開

日本脂質生化学 Web ページに著作権の学会移行に関する説明文を掲載し、反対意見がないようであれば、年会要旨集である『脂質生化学研究』の国会図書館での電子化とその公開（発刊後5年以上経過したもの）、及び、過去版サキュラーPDFを当学会 Web ページにて掲載することが承認された。

3 令和7年度日本脂質生化学会・第2回幹事会

日時：令和7年12月1日（月）14:00-16:00

場所：国立健康危機管理研究機構 会議室（WEB 併用のハイブリッド会議）

現地参加者：12名、WEB参加者：18名、委任表明：8名

議事

- (1) 令和7年度事業報告、会計が市会計幹事から報告され、決算案の審議がなされ了承された。決算案は42、43ページの資料を参照されたい。

令和7年度事業報告

会員数 525名（令和7年11月5日）

（名誉会員 34名、正会員 423名、学生会員 61名、賛助会員 7件）

新入会 30名（正会員 15名、学生会員名）

退会 26名（正会員 12名、学生会員 7名、賛助会員（5口）1件、名誉会員 6名）

会費納入率 78.00%（令和6年度12月末実績 78.20%）

賛助会員 7社（18口）（令和6年実績 9社24口、令和5年実績 10社29口）

| | | | |
|----|------|-----------------|---------------|
| 役員 | 会長 | 花田賢太郎 | （令和8年12月31日迄） |
| | 庶務幹事 | 進藤英雄 | （同上） |
| | 会計幹事 | 市 育代 | （同上） |
| | 会計監査 | 新井洋由 | （同上） |
| | 幹事 | （令和8年度事業計画の項参照） | |

事業

イ) 令和7年度（第67回）学会

ロ) 脂質生化学研究 67巻の発行（本文 290頁）

ハ) 脂質生化学研究 Circular 2025の発行（本文 50頁）

ニ) 総会及び幹事会の開催

(2) 令和8年度事業計画、予算案の審議がなされ、了承された。

令和8年度事業計画

| | | | |
|----|------|-------|---------------|
| 役員 | 会長 | 花田賢太郎 | (令和8年12月31日迄) |
| | 庶務幹事 | 進藤英雄 | (同上) |
| | 会計幹事 | 市 育代 | (同上) |
| | 会計監査 | 新井洋由 | (同上) |

幹事

(任期 令和8年12月31日迄)

有田 誠、有田正規、石井 聡、岩渕和久、植田和光、榎本和生、小川 順、菊田安至、齋藤芳郎、佐々木雄彦、佐藤隆一郎、白井康仁、進藤英雄、杉本博之、杉山英子、瀬川勝盛、田口友彦、徳村 彰、中津 史、中村元直、花田賢太郎、松田純子、三浦進司、村田幸久、室田佳恵子、森田真也、山崎 晶、山田健一、横溝岳彦、横山知永子

(任期 令和9年12月31日迄)

青木淳賢、和泉孝志、井ノ口仁一、梅田真郷、奥平桂一郎、京ヶ島守、久下 理、蔵野信、島野 仁、鈴木健一、田中 保、田村 康、中村由和、本家孝一、松坂 賢、見市文香

(任期 令和10年12月31日迄)

新井洋由、池田和貴、板部洋之、稲森啓一郎、樺山一哉、北谷和之、小林俊秀、鈴木佑典、瀬藤光利、高橋吉孝、谷 元洋、供田 洋、仲川清隆、松澤佑次、光武 進、南 彰、山地俊之、山本 圭

(任期 令和11年12月31日迄)

安部真人、厚味厳一、池ノ内順一、市 育代、伊藤俊樹、今井浩孝、今井博之、岩部美紀、大城太一、岡本安雄、沖野 望、小倉正恒、笠間健嗣、木原章雄、櫛 泰典、坂根郁夫、末次志郎、菅谷純子、杉本幸彦、鈴木 聡、中谷良人、中西猛夫、中村浩之、中山仁志、原俊太郎、原 雄二、深澤征義、松本幸次、村上 誠、矢富 裕、柳田圭介、山内祥生、山下 純、山本登志子、横山和明

名誉会員(令和8年1月1日時点)

五十嵐靖之、池澤宏郎、市川 厚、伊藤俊洋、伊東 信、井上圭三、岩森正男、上田夏生、大島美恵子、唐澤 健、川口昭彦、鬼頭 誠、古賀洋介、小林哲幸、齋藤国彦、清水孝雄、鈴木明身、脊山洋右、瀧 孝雄、田口 良、多久和陽、谷口直之、徳村 彰、中野益男、中村和生、西島正弘、飯田静夫、深見希代子、牧田 章、宮澤陽夫、山下 哲、山田晃弘、横山信治、吉本谷博、和久敬蔵

物故名誉会員(令和7年1月1日～12月31日に学会として把握できた方)

鈴木邦彦、竹縄忠臣、玉井洋一、野島庄七、平林義雄、矢野郁也

賛助会員:7社(計18口)

- (5口) 佐藤製菓(株)、ホロバイオ(株)
- (3口) (株) ナールスコーポレーション
- (2口) 雪印メグミルク(株)
- (1口) (株) 大塚製薬工場、備前化成(株)、(株) 極洋

事業

イ) 令和 8 年度 (第 68 回) 学会

実行委員長 : 滋賀医科大学
薬物治療学講座 教授、医学部附属病院薬剤部 部長 森田 真也 先生
日時 : 令和 8 年 6 月 4 日 (木)、5 日 (金)
場所 : 滋賀県立文化産業交流会館 (滋賀県米原市下多良 2 丁目 137)

ロ) 脂質生化学研究 68 巻発行

| | |
|---------------------------|--------------|
| 演題募集 (Circular2026 の発行時に) | 令和 8 年 1 月下旬 |
| 演題申込および原稿締切 | 令和 8 年 2 月下旬 |
| プログラム編成会議 | 令和 8 年 3 月下旬 |
| 入稿 | 令和 8 年 4 月中旬 |
| 講演集発送 | 令和 8 年 5 月下旬 |

ハ) 脂質生化学研究 Circular2026 の発行

1 月中旬

ニ) 会議

| | |
|--------------|--------------------|
| 日本脂質生化学研究会総会 | 令和 8 年 6 月 4 日 (木) |
| 第 1 回幹事会 | 令和 8 年 6 月 4 日 (木) |
| 第 2 回幹事会 | 令和 8 年 12 月 |

(3) 令和 8 年 (第 68 回) 年大会準備状況の報告

森田真也 次大会長より大会の準備状況が報告された。

(4) 『脂質生化学研究』(発刊後 5 年以上経過したもの) 及び、過去版サキュラーの公開

国会図書館に寄贈した『脂質生化学研究』で発刊後 5 年以上経過したものの電子化公開、及び、過去版サキュラーの当学会 Web ページ掲載に関する著作権を日本脂質生化学会に移管することへの意見聴取を当学会 web 上で行った。約半年間の意見聴取期間中に反対意見がなかったため、上記に関わる著作権は当学会に移管されたとみなした上でこれら著作物を公開することに決定した。

(5) 細則案の審議と承認

細則案の第 1, 2, 3, 4, 5, 8, 9, 10, 11 条は承認された。内容は学会 Web ページを参照されたい。第 6 条の (年会費)、第 7 条 (会計と会計監査)、第 12 条 (除名) について、一部の内容について今後も審議を継続することとなった。

日本脂質生化学会
令和7年度仮決算明細

(令和7年1月1日～令和7年11月18日)

| ＜収入の部＞ | | 令和7年度 | 令和8年度案 | |
|--------|-----------|---------------|-----------|------------------------|
| 項目 | | 内 容 | 金 額 | 金 額 |
| 個人会費 | 令和7年度会費 | 5,000×341名 | 1,705,000 | 2,083,000 2,688,000 |
| | 令和7年度学生会費 | 3,000×45名 | 135,000 | |
| | 過年度会費 | 5,000×43名 | 215,000 | |
| | 過年度学生会費 | 3,000×7名 | 21,000 | |
| | 次年度会費 | 7,000×1名 | 7,000 | |
| | 次年度学生会費 | 2,000×0名 | 0 | |
| 賛助会員会費 | | 8社×19口分と次年度1口 | 170,000 | 170,000 |
| 講演集売上 | | 5,000×24冊 | 140,000 | 100,000 |
| 広告収入 | | | 0 | 0 |
| 寄付金 | | | 0 | 0 |
| 利息 | | | 2,110 | 2,110 |
| 雑収入 | | | 20,240 | 20,240 |
| | 著作料 | 医学中央雑誌 | 20,240 | |
| 小 計 | | | 2,415,350 | 2,980,350 |
| 前年度繰越金 | | | 4,436,978 | 3,121,025 |
| 合 計 | | | 6,852,328 | 6,101,375 |

| ＜支出の部＞ | | 令和7年度 | 令和8年度案 | |
|--------------------|-----|---------------------|-----------|------------------------|
| 項目 | | 内 容 | 金 額 | 金 額 |
| 研究会補助 | | 第67回日本脂質生化学会（東京・船堀） | 844,030 | 900,000 |
| 会報経費 | 製作費 | 600部(税込み) | 160,272 | 318,397 0 |
| | 発送費 | 575件 | 158,125 | |
| 講演集製作費（発送込み） | | 600部(税込み) | 664,771 | 708,268 710,000 |
| 講演集追加製作費（発送含まず） | | 20部(税込み) | 43,497 | |
| 旅費 | | | 30,000 | 40,000 |
| 役員事務経費 | | 会長銀行口座開設 | 1,100 | 70,948 70,000 |
| | | 振込み手数料 | 3,960 | |
| | | 庶務事務経費 | 20,000 | |
| | | UMIN使用費 | 30,000 | |
| | | プログラム委員会会合費 | 2,888 | |
| | | 第2回幹事会会合費 | 3,000 | |
| | | その他 | 10,000 | |
| サーバー・ドメイン費 | | | 115,257 | 120,000 |
| Lipidbankサーバの更新作業費 | | | 433,125 | 0 |
| ホームページ制作費 | | | 100,000 | 0 |
| 事務委託関係費 | | 事務委託費 | 825,000 | 1,094,778 1,100,000 |
| | | 会費請求関連費 | 168,278 | |
| | | その他 | 101,500 | |
| 予備費 | | | 16,500 | 100,000 |
| 小 計 | | | 3,731,303 | 3,040,000 |
| 次年度繰越金 | | | 3,121,025 | 3,061,375 |
| 合 計 | | | 6,852,328 | 6,101,375 |

注) 上記及び次ページの仮予算明細＜支出の部＞令和7年度・「事務委託費」概算値の年間82.5万円は55万円が正しく、令和8年総会時資料では修正する予定

<令和7年度支出の部の詳細>

| 項目 | 内容 | | 今後執行予定 (概算) | 金額 | 備考 |
|----------------------|--|--|---|-----------|--|
| | 11/18時点 執行額 | | | | |
| 研究会補助 | 第67回日本脂質生化学会(東京・船橋) | 844,030 | 0 | 844,030 | R7補助金90万円中55970円返却 |
| 会報経費* | 製作費 600部(税込み) 発送費 575件 | (160,272) (158,125) | (0) (0) | 318,397 | アイシー製本印刷 |
| 講演集製作費(発送込み) | 600部(税込み) | (664,771) | (0) | 708,268 | アイシー製本印刷 |
| 講演集追加製作費(発送含まず) | 20部(税込み) | (43,497) | (0) | | |
| 旅費 | | 0 | 30,000 | 30,000 | 関東圏外からの幹事会参加役員・実行委員長交通費 |
| 役員事務経費 | 会長銀行口座開設 振込み手数料 庶務事務経費 UMIN使用費 プログラム委員会合費 第2回幹事会合費 その他 | (1,100) (1,980) (5,112) (30,000) (2,888) (0) (0) | (0) (1,980) (14,888) (0) (0) (3,000) (10,000) | 70,948 | みずほ銀行 みずほ銀行 東京大学(年会演題登録用) 25.3.21.PET茶代 |
| サーバー・ドメイン費 | | 115,257 | 0 | 115,257 | さくらインターネット |
| Lipidbankサーバーの更新作業費 | | 433,125 | 0 | 433,125 | リオレクト社 |
| ホームページ制作費 | | 0 | 100,000 | 100,000 | メディアアイパンパクト社(電子化会報公開に係るIP容量増設) |
| 事務委託関係費 (幸福社支払い分) | 事務委託費 会費請求関連費 その他 | (550,000) (168,278) (59,557) | (275,000) (0) (41,943) | 1,094,778 | 4か月毎に26万円+10%税 振込取扱票1000部、封筒計1600部、請求書印刷と郵送 コピー代、立替え郵送費など コピー代、立替え郵送費など |
| 予備費 | | 0 | 16,500 | 16,500 | 慶再費等の臨時出費項目名を「経費」から「予備費」に変更 |
| 小計 | | | | 3,731,303 | |
| 次年度繰越金 | | | | 3,121,025 | |
| 合計 | | | | 6,852,328 | |

賛助会員

- (5口) 佐藤製薬株式会社
ホロバイオ株式会社
- (3口) 株式会社ナールスコポーレーション
- (2口) 雪印メグミルク株式会社
- (1口) 株式会社大塚製薬工場
備前化成株式会社
株式会社極洋

(以上7社18口)

日本脂質生化学会 会則

第1条 名称

本会を日本脂質生化学会(The Japanese Conference on the Biochemistry of Lipids, JCBL)と称する。

第2条 目的

本会は脂質の領域における化学的、生化学的研究の発展と向上を図り、あわせて研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事業

本会は、第2条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。

- (1)研究集会の開催
- (2)その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会員

本会の会員には次の種類がある。

- (1)正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し、本会で定めた会費を納入する者。
- (2)学生会員は、大学院または大学等に在籍し、脂質の化学的、生化学的研究に関連する分野を専攻する者で、正会員 1 名の推薦をうけて本会に登録を行い、本会で定めた会費を納入する者。
- (3)賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者。
- (4)名誉会員は、幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役員、幹事、名誉会長

- (1)本会は、その運営のために、役員として会長1名、庶務幹事1名、会計幹事1名、会計監査1名をおき、役員会を構成する。
- (2)本会の運営上の重要事項について役員会の諮問に応ずるものとして幹事をおく。
- (3)役員および幹事は幹事会を構成し、会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (4)名誉会長をおくことができる。名誉会長・名誉会員は幹事会に出席して意見を述べることができる。
- (5)会長、庶務幹事、会計幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする、重任はさまたげない。

第6条 総会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認する。決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項
- (4) その他

第7条 経理

本会を運営するために、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、毎年1月1日より12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は、会計監査によって監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は、会費および寄附金による。

第8条 事務局

本会は会務に関する事務をおこなうために本会との間で契約の下に事務局を置くことができる。事務局を置いた場合、庶務幹事は事務局とも連携して、会員の便宜を供する。

第9条 委員会

本会に関わる活動のために各種委員会を設置できる。各委員会に委員長を一名置く。

第10条 細則

本会則に沿って本会を運営する際に必要な事項は細則に定める。細則は本会の役員が起案し、幹事会の承認をもって発効される。発効された細則は総会に報告する。

附則

- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
- (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。

(平成14年6月14日改訂)

(平成17年6月 2日改訂)

(平成23年5月13日改訂)

(令和7年6月9日改訂)

学会事務の取り扱い内容と連絡先

日本脂質生化学会の事務局は、(株)春恒社内に置き、以下の事務取り扱いを行なっております。

1. 入会・退会の受付
2. 年会費の請求および徴収
3. 所属・住所・氏名等の変更の受付

日本脂質生化学会事務局の連絡先

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2-4-12 新宿ラムダックスビル 9F

(株)春恒社 学会事業部内

TEL : 03-5291-6231

FAX : 03-5291-2176

E-mail : JCBL@shunkosha.com

日本脂質生化学会の年会費は、正会員 7,000 円、学生会員 無料です。入会ご希望の方は上記の日本脂質生化学会事務局までお問い合わせ下さい。

日本脂質生化学会 会長 花田 賢太郎



THE JAPANESE CONFERENCE ON THE BIOCHEMISTRY OF LIPIDS

c/o Shunkosha Co., Ltd.
Lamdax Building 9F
2-4-12 Ohkubo, Shinjku-ku, Tokyo 169-0072, Japan
JCBL@shunkosha.com
Tel: +81-3-5291-6231, Fax: +81-3-5291-2176

日本脂質生化学会事務局

〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-12 新宿ラムダックスビル9F
(株) 春恒社 学会事業部内
JCBL@shunkosha.com
Tel: +81-3-5291-6231, Fax: +81-3-5291-2176